

NPO 法人 日本ビオトープ協会
第 17 回顕彰受賞ビオトープの紹介

◇顕彰委員会委員長の講評・報告

『ビオトープフォーラム in 札幌 2025』2025 年 6 月 13 日、札幌市教育文化会館 4F 講堂にて

最初に、今回顕彰されました 各団体の皆様にお祝い申し上げます。

本年 4 月 15 日に顕彰委員会を開催。各支部からの推薦を受けた案件は、いずれもビオトープ造成、維持管理、環境教育、ステークホルダー、地域貢献などで優れた取組みであり、高く評価できるビオトープでした。

◎学校ビオトープ大賞を受賞されました、茨城県「中庭プロジェクト 上大野小ビオトープ」は、校内のコンクリート池を活用し、生物多様性を豊かにする様々な水辺の創出がなされています。また、田畑耕作地も設け、協働の喜びや気づきを提供できる空間になっています。子供達が主体的な取り組みをしており、教職員の意識も高く、継続的な活動と生物の生息環境の充実が期待できます。

◎協会会長特別賞に選定された、北海道「平取地域イオル再生事業」は、アイヌ伝統のイオル再生事業（アイヌの伝統のイオルの森、水辺空間、コタン（集落）の再現等）で、ビオトープの思想と共通するものです。イオル型複層林の育成管理や水辺モニタリングを、平取町が主体となって長期的に取り組んでいます。

◎審査委員長賞受賞の富山県「バタフライガーデン(北陸電気工事(株)技術開発センタービオトープ)」は、地域のシンボル木のカラスザンショウ（アゲハチョウ食草）を残し、雨水を利用した池周辺に蝶の食草、蜜のある花木を植栽し昆虫との共生が図られています。幼稚園や学校、地域住民に利活用されています。

◎環境教育賞の愛知県「ナカバイオ（ホタルが舞う学校ビオトープ）」は、ホタルが舞う学校づくりを目指す豊田市立中金小学校の学校ビオトープです。ビオトープ管理とホタル飼育を担う「中金ホタル保存会」が活動しています。減少するホタル生息地の拠点として、地域住民と学校の繋がりの場でもあります。

◎地域活動貢献賞に選定された、岩手県「根浜ビオトープ」は、釜石市において震災前の自然環境の再生を目指すビオトープです。湿地環境を再生させだけではなく、水辺の生物多様性を育むことで、観察モニタリング及び体験教育を行う地域のビオトープとしての活用を目的としています。

今回、以上 5 件を顕彰させていただきました。各団体におかれましては、ビオトープの普及啓蒙、環境教育、地域活性化につながる活動を継続していただくようお願い申し上げます。

（協会顕彰委員長 鈴木邦雄代表顧問）



※フォーラムの顕彰事例発表「上大野小ビオトープ」「平取地域イオル再生事業」は、YouTube にて映像公開中です。YouTube にて [ビオトープフォーラム札幌](#) で検索をお願いいたします。

◇学校ビオトープ大賞

【下記各顕彰書類より転記】

名 称	中庭プロジェクト 上大野小ビオトープ
受賞者	水戸市立 上大野小学校、株式会社 田寺緑地土木、株式会社 砂押園芸
【テーマ・概要】 水戸市では、豊かな自然環境の中で、特色ある教育活動や少人数によるきめ細かな指導を行っている学校を「小規模特認校」として指定しています。上大野小学校は平成 30 年よりこの認定校となりました。現在 75 名の児童が在籍し、充実した設備の中、観察・実験、ディスカッション学習など、魅力ある理科・環境教育を推進しています。 そして、活動の中心には学校中庭のビオトープが活用されています。このビオトープは、令和 4 年に整備され「上大野の自然を中庭に再現しよう」というテーマに沿い制作され、畑・田んぼ・池や流れなどから構成されています。 具体的な活動は、子供たちの興味や関心にあわせ 3 つの班編成で行い、それぞれ調査、分析・検討、発表・改善策までサイクル的に活動を行っています。 【整備方針と管理手法】 本施設は、令和 2 年に計画がスタート、現地調査、意見交換を重ね、放置されていた中庭のコンクリート池を活用し、令和 4 年に学校ビオトープとして整備されました。ビオトープ内には、校舎から排水される雨水の有効利用を目的とした 2000ℓ の貯留タンクを設置、流れに活用すると同時に、散水などにも使えるようにしています。 水辺に造られた多様な環境はエコトーンを形成し、多くの動植物が生息しています。本年度は県自然博物館専門家の指導を受け、生物調査を行いました。このほか、田んぼや畑での作物栽培を通して、地域の自然環境や人々の営みを知る、体験の場として活用しています。 このような環境の中で、児童たちは活動における問題に対して、その対策、解決、結果についてまとめるなど、主体性を持って活動しています。また、職員においては地元大学の協力を得て研修会を実施、本活動への取り組みの工夫について研究を行い、積極的に関わることができています。 今後、この小さなビオトープとその活動を通して、人と人を繋ぎ、地域と一体となって身近な自然と、子供たちの心を守り育てて生きたいと考えています。	



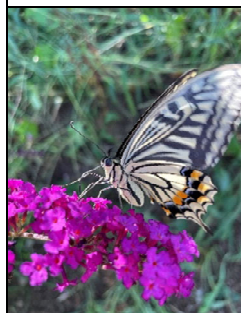
◇協会会長特別賞

名 称	平取地域イオル再生事業
受賞者	平取町、株式会社 平取町アイヌ文化振興公社、平取アイヌ協会
【テーマ・概要】 アイヌ文化の中心的地域の一つである平取町では、アイヌ文化を支える伝統的生活空間(イオル)の再生事業が次の 3 項目で行われている。①イオルの森整備: 樹木や草本などの自然素材の確保が持続的に可能となるイオルの森を創造、②コタン(集落)の再現: 自然素材の採取/加工/利用を通じた伝統的な文化活動の実践の場としてのコタンを再現、③水辺空間整備: チセ(家)の復元や生活民具の複製及び伝統料理に必要な自然素材や食材の採取が可能な水辺空間の整備。 【整備方針と管理手法】 長期的な視点に立ち、アイヌ文化を育んできた自然の再生により、アイヌ文化に必要な自然素材の供給システムの構築やコタンでのアイヌ文化継承者(実践者及び伝統工芸技術の伝承者)による体験活動など、アイヌ以外の人々への概括的な普及・啓発にとどまらない、より専門的・高度な活動の拠点としての性質を担う「活動型イオル」を目指して、アイヌ文化継承者の育成を図るほか、ネットワークとしての他の地域への自然素材の供給も視野に入れた事業を実施する。	



◇審査委員長賞

名 称	バタフライガーデン(北陸電気工事(株)技術開発センタービオトープ)
受賞者	北陸電気工事株式会社、株式会社久郷一樹園
【テーマ・概要】 同会社の既存の能力開発センターの隣接地に新たに建設された技術開発センターの敷地のコーナーに設けられたビオトープである。元々、既存樹として地域のシンボルツリーでもあったカラスザンショウとケヤキを残し、特にカラスザンショウの特性でもある、アゲハチョウ科の蝶の食草であることを生かし、バタフライガーデンを作ることとした。上段の建物と駐車場の雨水を利用して流れと池を作り、周辺に蝶の食草となるセリ・ウマノスズクサ・ブッドレア・ハンゲシヨウ等を植栽した。蜜を吸うための花木として、ヤマボウシ・ドウダンツツジ・サザンカ・コデマリ・サツキ・ヒラドツツジ・アジサイ・ハナショウブ等を、それらを取り囲むように植栽している。また、池にはガマやヨシなどの水草を植栽し、他の昆虫との共生も図っている。	



【整備方針と管理手法】

元々、ここは地域の広場としても活用されてきた場所であり、今回作られたビオトープも地域の人々に開放されており、いつでも自由に活用することができるようになっている。又、春から夏にかけて蝶の産卵時期には、近隣の幼稚園や小学校の生徒の環境教育の場としても活用されている。

ビオトープの管理は植物や蝶を中心とした昆虫や生物に興味と理解のある職員が中心となり、年間を通じた草刈りや捕植などの維持管理を熱心に行っている。作られて3年が経つが、健全に維持育成が図られている事は評価に値する。



◇環境教育賞

名 称	ナカピオ（ホタルが舞う学校ビオトープ）
受賞者	豊田市立中金小学校 中金ホタル保存会、株式会社鈴鍵

【テーマ・概要】

中金小学校は、愛知県の中でラムサール条約に登録される矢並湿地、上高湿地及び恩真寺湿地に代表される湧水湿地が集中する地域に近い。また、校区内の湿地ではハッチョウトンボ、ヒメタイコウチなどの昆虫類のほか、校庭を貫流するカ石川にはホトケドジョウやスナヤツメなどの希少な魚類の生息も確認されている。

校庭にビオトープを整備することにより、児童や教員、地域住民がこれらの生物やその生息環境への理解を深め、重要性を認識し、さらにはそれらの生息地の保全を意識したくらし方への発展が期待できる。また、整備した環境が、校区に点在する小規模な水辺環境と連携し、生物の生息環境の質を向上させる効果もある。

【整備方針と管理手法】

本校は、地区に少なくなったホタルを復活させようと、長年「野口ホタルの会」の小笠原政巳様を地域講師に迎え、4年生が「ホタルの飼育」を行ってきた。令和6年3月に活動の中心となるビオトープが完成し「ホタルが舞う学校づくり」を目指した活動に変化した。令和5年度に「中金ホタル保存会」が発足し、ビオトープの管理からホタルの飼育まで担当する組織が出来上がっている。学校では、株式会社鈴鍵の社員の方の指導の下、ビオトープ学習会やビオトープ周辺の草木の管理も児童を巻き込んで行っている。また、「中金ホタル保存会」の呼びかけでホタルの幼虫を育てる活動が地域の家庭に広がってきており、2月～3月にかけて育てたホタルの幼虫をビオトープに放流している。ビオトープ内には、児童や地域の方たちが放ったカワニナの繁殖が確認できている。



◇地域活動貢献賞

名 称	根浜ビオトープ
受賞者	かまいし環境ネットワーク、株式会社かまいしDMC、株式会社佐野建設

【テーマ・概要】

2011年3月の東日本大震災・大津波の襲来により破壊されてしまった、地域の豊かな海辺や水辺の環境を取り戻し、生物の生息環境を創出するため、地元環境団体「かまいし環境ネットワーク」が、地域で持続可能な観光を進める「かまいしDMC」と連携。生物の観察やさわ水の状況などを熟考し、およそ5年の構想を経て、地元「釜石東ロータリークラブ」の寄付により造成した。トウホクサンショウウオやシュレーゲルアオガエル、ニホンアマガエルなどの生息が造成前より確認されており、日本ビオトープ協会北海道東北地区委員会のご指導の下に、それらの生き物に、より適した、かつ震災前の環境を再生させた。また再生させるだけでなく、地域の水辺の生物多様性を育み、観察モニタリング及び体験教育を行う地域資源として活用することを目的としている。

【整備方針と管理手法】

「地域の自然の特色をまもり、小さな生き物への愛情を育む」を方針に、近自然の設計を行い、自然に起こる変遷に柔軟に対応しながら整備を進めている。具体的には、豪雨や濁水の際には周囲の環境に合わせて工夫を行い、そこにある自然なものを使い対処するなどしている。管理は、市の施設である「根浜シーサイド」が隣接しているため、日々観察対応を行っている。手法は、草刈り、外来種の抑制など必要に応じて適宜進めている。また、季節に応じて観察会を行い、住民への周知と環境保護への意識の醸成を高める活動を行っている。



その7. 目黒区立中目黒公園

農学博士、元東京農業大学
日本ビオトープ協会顧問

立川 周二



目黒区は武蔵野台地の南東部に位置し、小中河川が台地を刻んで起伏が多く、坂道が目立つ地形をしています。江戸時代の目黒川流域は、水田耕作を主とする農業地帯として開発されました。明治になると中小工業が進出し、目黒川は運河として工場地帯の舟運に利用されます。昭和の戦後になると、都市化が進み工場と家庭排水が直接目黒川に流れ、汚染が問題になりました。この対策として行われたのが、目黒川の支流を下水幹線に整備して暗渠化し、汚水が直接流出することを止めることでした。現在では、高度処理された再生水を流し水量を確保して、「清流の復活」を行っています。中目黒公園近くの船入場（ふないりば）の広場の地下には、治水対策の為に「地下箱式調節池」が設置されています。洪水の緊急時には、5万5千立方メートルの水を一時的に溜めることができます。

中目黒公園は、渋谷より東横線で2つ目の「中目黒駅」から、徒歩約10分の目黒川左岸に位置し、東京共済病院に隣接しています。ここは目黒区の中心部にあたり、区役所も近く様々な高層ビルが立ち並ぶ場所です。ビルの谷間を流れる目黒川は、上流は暗渠化されましたがこの辺りから開渠し、両岸は桜並木となり花の季節には最も人出のある所です。公園の入口は緑の小道が続きますが、目立つような門はありません。入口から細道の両側は花壇となり、季節の花が咲いています。中へ進むと都会の喧騒は消え、これまでの街の印象が変わります。林が切れると視界が開けて、芝生の広場には人々が食事をしたり、飲み物を持って会話を楽しんでいます。奥に進むと草が異なり、シバではない草丈の高い種類が混じり「原っぱ」と呼ばれる雑草地になります。ここでは数人の子供と親らしき人が、虫採り網をもって走り回っていました。虫かごには、ショウリョウバッタとオオカマキリの幼虫が入っていました。原っぱの脇に大きな水溜りがあって、水生の生きものすみ場所を備えています。ヒキガエルが産卵するそうですが、このビオトープでもアメリカザリガニの環境破壊が深刻な課題です。この公園の開設には、官民一体となり自由に意見を出し合い、いろいろな制約を乗り越え、工夫されながら生命再生型公園が実現しました。とくに生きものに関わる部分には、今後も人手が必要で、ボランティアの活動が必須です。

この小文をまとめるに当たり、「花とみどりの学習館」のインタープリターをされている佐藤多寿子さん、公園開設から携わって来られたボランティアの小泉一さんに話を伺うことができました。ご協力ありがとうございました。



図1. 駅から目黒川の左岸を歩いて約10分、大きな病院を過ぎると中目黒公園になります。緑の林へ続く細道が、公園に誘ってくれます。



図2. 車椅子で来園の方にも楽しんで戴けるよう、植栽をやや高めに配置しています。作業のボランティアの方々をよく心得ています。



図3. 樹木に囲まれた草原は二分されます。寝転がれる芝地と、草丈の高い草も混じる「原っぱ」です。こちらでは虫採りができます。



図4. 林縁の一角に、大きめの水溜りがあります。「いきもの池」とよばれ、毎年ヒキガエルが産卵し、オタマジャクシが見られます。



図5. 「花とみどりの学習館」には、来園者に自然の不思議を解説する専門員の方が常駐し、ボランティア活動の拠点にもなっています。



図6. 「学習館」の受付です。多くの人々の対応がある一方、行事の調整や自然を理解するためのポスター等資料を準備します。



図7. 公園の「原っぱ」で見られるバッタ類を写真で示したポスター。このような資料は、生きものを理解するためには必要なものです。



図8. 公園には緑豊かな場所の他に、区民の健康と体力のためのグラウンドがあります。試合のできるサッカー場が2面あります。



図9. 公園から目黒川に下ると、船入場と呼ばれる運河時代に舟運の積荷を上げ下げした場所に出ます。海の魚がここまで上ります。

編集後記

“原点”に立ち返ることは、日々の活動を見つめ直す貴重な機会となります。今号では「ビオトープの原点を学ぶ」というテーマを掲げ、その意味をさまざまな視点から探りました。

巻頭言には、長年にわたり現場と理論の両面からビオトープに関わってこられた岡村俊邦先生より、「ビオトープの森再生の目的と手段」をご寄稿いただきました。「手段が目的化する」という言葉には、私たち一人ひとりが再生の現場で直面する問いが込められており、深い示唆を与えてくれます。

また、現場で活動続ける皆様の声からは、「守る」だけでなく「育む」「つなぐ」といった、ビオトープの多面的な在り方が浮かび上がってきました。

「原点を学ぶ」ということは、単なる過去の回顧ではなく、未来への一歩を確かなものとするための足元の確認でもあります。編集を通じて、そのことを実感しました。

本誌が、皆さまの活動や学びの一助となれば幸いです。ご多忙の中、ご執筆いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

編集委員：情報委員 若月学・砂押一成、正副会長、総務委員、本部事務局

自然との共生をめざして一緒に活動しませんか。 会員募集中

- | | |
|-------|--|
| 会員の種類 | ・法人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する法人 |
| | ・個人正会員 この法人の目的に賛同して入会し、活動を推進する個人 |
| 年会費 | ・法人正会員 100,000円 |
| | ・個人正会員 10,000円 |
| | 10月以降3月末までのご入会は規程により、年会費は半期分となります。 |
| 会員の特典 | ・年2回発行の機関紙「ビオトープ」の入手。 |
| | ・会員メーリングリストによりE-Mailによるシンポジウム、研修会等情報の入手。 |
| | ・その他、地区活動への参加など。 |

入会手続き、入会申込用紙については、WEBページ <https://www.biotope.gr.jp/application/apply/> または下記本部事務局までメールかFAXでお問い合わせ下さい。

日本ビオトープ協会誌「ビオトープ」No.56

2025年(令和7年)8月31日発行

発行所	特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会
発行責任者	久郷 慎治 (日本ビオトープ協会 会長)
編集	協会 情報委員会・正副会長・総務委員会・本部事務局
本部事務局	〒170-0005
	東京都豊島区南大塚2-6-7-101
	TEL 03-6304-1650 FAX 03-6304-1651
	E-Mail honbu@biotope.gr.jp
	URL https://www.biotope.gr.jp/

会員、ビオトープアドバイザーからの投稿歓迎

ビオトープの研究、実践事例等、会員・ビオトープアドバイザーの投稿を募集しています。投稿頂く場合は本部事務局までご一報下さい。



「カッコウセンノウの花に来たオナガアゲハ」
写真 内海千櫻氏 撮影